31人目の被害者

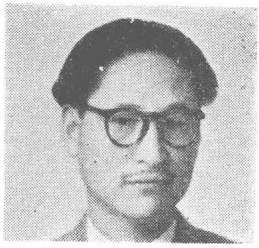
吉岡隆平

目　　書者

恐るべき月賦住宅

吉岡隆平

八雲書店刊



吉岡隆平
兵庫県尼崎市汐江西ノ口一番地
大正六年三月七日生
日東診療所経営
尼崎市潮小学校　TA会長

三十一人目の被害者

昭和三十四年十一月二十日　印刷
昭和三十四年十一月廿五日　発行

定価　二三〇円

著者　吉岡隆平
発行者　中村梧一郎
発行所　八雲書店
東京都文京区森川町一一一
電話小石川（92）一八五二

落丁乱丁本はおとりかえいたします

© R. YOSIOKA *1959* Printed in Japan

序

本書は、私が日本電建被害者同盟の委員長として、月払い住宅の日本電建株式会社と闘ったいつわりのない闘争記録です。

私がこの書を刊行したのは、文化国家、民主的法治国家を呼称するわが国において、幾百千万の善良な市民をあざむき、人権を無視し、人道を蹂躙し、その上に立って巨億の富を築き、しかもそれが合法的であるという名の下に法律の保護さえ受けている事実を黙視することができなかったからです。

私はこの闘いを通じて私たちが住居という問題について――それは政治の貧困にからむ根本問題ですが――あまりにも無知であり、あまりにも善良すぎたことを知りました。端的にいえば、私たちは月払いで家が建つという餌にとびつく貧婪な魚のごとくでさえあったのです。

それというのも、私たちは人類として生まれてきたが故に、住居、つまり家という厄介な問題を

背負っているからなのです。たとえ衣食の問題が解決しても家がなければこの地上に住むことが出来ないし、一人前の顔をして世間の人人に交わることも出来ないのです。しかも、今日の世の中では、悲しいことですが、個人の力ではこの問題の解決は困難であり時には不可能でさえあるのです。それでいて私たちは家が欲しいのです。人間として住む所が欲しいのです。家を持って一人前の顔をしたいのです。この痛切なる欲求は時には貧婪でさえあってよいのではないでしょうか。だが、それだからといって、私たちのこの弱点に乗じて、それを利用し人を苦しめベテンにかけて金を儲けるということが、いかに合法的であるとはいえ、許されてよいことではありますまい。

私たちの日本電建被害者同盟は、私たちに襲いかかってきた暗い台風から身を守ることはできました。だが、この根本問題については、ついに、ふれることは出来ませんでした。それは私たちの力があまりにも弱少しすぎたからですし、問題が政治問題でもあるからなのです。

以上のような意味において、私は本書が一人でも多くの方方に読んで頂いて、この住居、家の根本的問題について真剣に考えて頂きたいと思うのです。政治家の方方も、真面目に住宅問題と取り組んで頂きたいと思うのです。それも、急いでやって頂きたいと思うのです。また住宅を営利の対象として事業を経営されている方方にも、誠実にこの問題を考えて頂きたいのです。さらに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

また、多くの人人が、家欲しさのあまり、甘言と好餌にとびつかないで、慎重に調査、研究されるように望みたいのです。以上のことがかなえられれば本書を刊行した私の望外の喜びであり、また私と行動を共にした三百数十名の同盟員の喜びでもあります。

本書を刊行するについては、実に多くの方方の温かい協力を得ました。またこの闘争の間に新聞、雑誌の編集の方方や第一線の記者の方方また弁護士その他の方方からも陰に陽に熱烈な支援を受けました。それらの方方には、一々御性名を印しませんが、ここに深く感謝の意を表します。

また本書中の手紙は原文のまま掲載させていただきました。

なお本書をお読み下さった方は、どうか御感想をお寄せ下さるよう御願い申し上げます。

昭和三十四年十一月

著　者

三十一人目の被害者

―恐るべき月賦住宅―

落し穴

一

私の妻は女医である。

彼女は奈良女高師、現在の奈良女子大の附属高女をへて終戦の年に大阪女子医専を卒業した。卒業と同時に彼女は大阪市民病院の東診療所につとめた。彼女の家は大阪東部の街、布施市にあった。布施市は日本の有名な閣市の街、鶴橋と隣りあわせで、その頃私はそこに住んでいた。

私はまもなく彼女と知りあった。当時、食料がひっ迫し、三十数日も配給はと絶え、ひときれの大根も、ひと握りの米もない日がつづいて、飢餓にみちた人人の群れが暗い街頭をさまよい歩いていた。やがて、東京でも大阪でも米よこせ運動が起り、布施市でも多数の市民がそれに参加

した。私も飢餓をもたらした者への怒りと、それと闘う誇りにみちた胸を抱いてその運動に加わり、いつか先頭に立っていた。当時、彼女は大阪市職員組合の婦人部長をしており、そうした民主団体の連絡会議が毎日のように開かれたが、私たちはそこで結び合わされたのだった。

やがて私たちは結婚をし、まもなく一人の男の子と一人の女の子が生まれた。長男は妻に似て目の大きな顔で、長女は私に似て面長な顔の娘であった。昭和二十七年に妻は大阪市の東北にある守口市の庭窪診療所長に就任したので、私たち一家はそこに移った。私は大阪市内のある新聞社につとめ、私たちの生活は幸福であった。しかし、私たちは人生をそこで足ぶみすることを好まなかった。私は彼女の才能をのばし、子供たちを幸福にすることが自分の義務と考えた。私たちは雇われた診療所長よりも、独立して自分の経営する診療所を持ちたかった。それを病院にまで発展さすことを虹のような夢にえがいたのだ。

昭和二十八年の暮に、私たちの念願が実現できる機会がきた。私は、はやる心をおさえて彼女にいった。

「ある周旋人の世話で、尼崎市に代々開業医であった家が借りられるんだ、さっそく移ろうではないか」

突然の言葉に、彼女はちょっとためらったようであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「どうして、尼崎市でないといけませんの」

尼崎市は大阪の西、兵庫県との境にある地面の低い工場地帯で、いつも工場の煙突から吐き出される煤煙が空を蔽っている古い街。だが、彼女はどうやら布施、守口と大阪市の周辺ばかりを歩いてき、今また周辺都市に行くことに懸念を感じたようである。だが、私はこの機会を逃しては独立のチャンスはそう再再やってこないと考えた。なぜなら、開業医はどこにでも住めばいいというわけにはいかないのだ。付近に開業医がすくないこと、相当数の患者がくる見込みのあること、できればそこがもと開業医であって、ある程度の信用がついていること、それらの条件にあうところはそうざらにはない。私は妻を説得にかかった。

「そこは、相当にはやっていた医者のあとで、それに近くには巨大なビール会社や鉄鋼の工場もある。近所の人たちもよさそうだ。ぼくらがそこで真実に働く人たちに奉仕するなら、きっとその人たちの熱い支持をうけるだろう。大都会のまん中でうとんぜられるより、どれほど生き甲斐があるかもしれないよ」

彼女は、私に説得されて、大きな目でうなずいた。彼女も心から不満ではなかったのだ。私たちは、年もおしつまったある冷たい風の日に、守口市から尼崎市にひっ越していった。

診療所は密集した家屋のせまい道に面した長屋の端であった。建物は古びて手ぜまで貧弱であ

ったが、しかし、はじめて独立し自山になった私たちには希望の輝きであった。私たちは古びた縁側の板や、年輪の浮きでた細い柱にも私たちの幸福を見出した。はじめて一軒の家を持ったもののみが知る共通の喜びだった。

だが、私たちの喜びはそう長くは続かなかった。私が予想もしなかった黒い嵐が莚物のすきまから吹きこむ寒風のようにやってきたのである。開業の設備をし、準備を整えても、私の期待と希望に反して患者がほとんどやってこないのだ。一人、二人、三人と、一日に患者が三人くればよい日がつづいた。

「どうしたのでしょう」

と、妻は顔を不安にくもらせた。

「いや、今にわんさときて、きみの目がまうようになるよ」

と、私は彼女をなぐさめたが、その実、心の中ではいいようのない不安を感じたのである。患者のこない医者、はやらない医者、それはなんと不愉快でいらだしいものであろうか。やがて明朗であった妻の頬にも憂いの影が黒く蔽いはじめ、私ははたと当惑をした。そのときになって、私ははじめて愚かにも、その家の世話をしてくれた周旋人にだまされたことを知ったのだ。私に、ようやくなじみはじめた付近の人が教えてくれた。

「あの家は、初代の医者が気狂いになって、襖障子に火をつけたいわくつきですよ、むろん火事にならないうちに消しとめました。その医者が精神病院に入ったあとにきた医者は、さっぱりはやらないで夜逃げ同様にひっ越していきました。そうとも知らずにきた三代目の若い医者は、夜逃げです。あなたもきっとだまされたのでしょう。あの家は縁起の悪い家ですよ」

私はそれを聞いたとき、全身から血の気が引いていくのを感じた。付近の人人は、そんな縁起の悪い家に性こりもなくひっ越して開業した私たちをよほどの変わり者と考えたであろう。医者としての妻の技術に疑いを持ったのかもしれない。やがて私たちも夜逃げをすると信じたかもしれない。私に忠告をしてくれたその人は、私にとどめをさすようにいった。

「あの家は医者の鬼門ですよ、祟りがあるんです、恐ろしい祟りが。早くひっ越した方がいいですよ」

聞いている私の顔は蒼白となり、膝はがくがくと音をたてた。やがて私の冷えきった心の底からは憤怒が熱いかたまりとなってこみあげてきた。

「なぜおれをだまさねばならんのだ、いくら生活のためとはいえ、人をだましてまで金を儲けねばならんのか」

私は心の中でそんな言葉を吐いて、その家を斡旋した者に怒りの炎を投げた。だが、私たちは

その家を去るわけにはいかなかった。たとえその家に祟りがあろうとも、近代科学を信じる私たちの良識はあとへ引き下ることを許さなかった。それに、私たちはすでに人生の長い旅路を、旅装を整えて歩みはじめたのだ。私は一家の責任者としてこの旅路を無事に完了させる義務があった。たとえその家が凶相であろうと、また不吉な黒い手がその家の棟にからみついているとしても、私はそれをはねのけて幸せな道を切り拓かねばならぬのだ。

私はその家にふみとどまって、それをやりとおそうと思った。私は自信があった。地上に太陽があり私に意志があるかぎり、私たちの前途は必ず輝かしいものになるだろう。

私はそのために新聞社をやめ、診療所の経営に熱中した。その日から私は付近の子供を集め、子供会をつくり、紙芝居や幻灯をやって子供となじんだ。青年の集まりの中にも入っていった。尼崎のいろいろの労働組合の事務所にもいった。ビール会社の組合にも出かけた。私は自分で診療所のビラを貼り、新聞の販売店に依頼して折込み広告をしたりした。それらのことは私にとってつらい苦しいことであるし、根気のいることでもあった。だが、私はそれを歯をくいしばってやりとおした。

やがて、私が道を歩くと「診療所のおっちゃんや」と、子供がなついてくれ、母親たちが頬に温かい微笑をふくんでくれるようになった。太陽は私たちを照らし、凍てついた小川がせせらぎの

音をたてるように私たちは活気を呈しはじめたのだ。診療所を訪れる患者の数は十人になり二十人になり、やがて四十人、五十人と増えていった。

死灰の中からフェニックスが飛び立ったのであった。妻はまた明朗をとりもどし、多忙を極め、私たちは再び微笑につつまれた人生を歩みつづけることが出来た。

私はトヨペットの中古車を購入し、運転技術を覚えた。ときには妻をのせて走り、あるときはそれで患者を私たちの診療所に運んだりした。私たちの一家は生き生きとし、前途に輝く太陽だけを見つめて前進すればいいのであった。

まもなく、私たちの診療所は、私たちにとっても患者にとっても十分なものでないようになってきた。四十人、五十人の患者を受入れるには待合室も診察室もせまかった。急に使用人のふえた居間は子供のくつろぎ場にもならなかった。

私は妻と相談をし、新しい診療所の計画をもくろみはじめた。人間の欲望にかぎりがないように希望も無限である。だが、私は希望をのぼり続けることが人生だと信じている。希望のない人生、それは死の灰のようなものではないか。妻は私の計画に頬を赤く染めた。

「居間はそうこらなくても、診察室と待合室は立派なものにしましょうよ」

と、白い指さきで私のえがいた家の図面を指した。

「うん、玄関はこんな形で、薬局はここで、病室もいくつか作りたいね」
「子供の部屋は日当りのよい場所に二つはほしいわ。それに看護婦さんの部屋も」
私たちは毎夜のように鉛筆を握りしめ、額をあわせて白い紙の上に家の設計図をえがいたり消したりした。私は紙の上で診察室や居間を太陽の光線の射す南側に持っていったり、朝の陽のさわやかな東側に移したりした。

人間が自分で家を築く楽しさと夢を、私は意外に根深いものであることを知った。それはほとんど本能的といえるほど私を夢中にさせた。そのうえ、私たちの希望をいっそうあふりたてるものがあった。デパートの書籍部には建築に関する出版物が幾十種類となくあって、一つの部を作っている。その本は赤や青や緑や紫の色彩で色どられ、直線や曲線の、或いは投影図式の建物や庭が埋まっている。ちょっと手にとっただけでも、「居間のデザイン」「住みよい家」「燃えない住宅」「すまいの設計」「住いの診断と増改築」「台所百五十集」「台所の工夫」とさい限がなかった。いつのまにか私の書架には、それらの本がいっぱい埋まっていった。
「まあきれい、このフランス風の設計にしましょうよ。屋根の格好のすばらしいこと。でもこちらの京都風の建物もすて難い味だわ」
と、妻は診察の余暇に本のページをくって胸をおどらせるのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.